

ポスターセッション

大学教育を再考する ～イマドキから見えるカタチ～

3/6 (日)

10:00-15:30 (コアタイム 12:00-13:30)

1号館

(掲載は学校名五十音順)

FDに関する情報収集、参加者間の交流を目的として、ポスターセッションが行われました。大学コンソーシアム京都加盟大学の教員、職員、学生が所属大学の特徴的なFDの取り組みを発表しました。

テーマ	外国語自律学習支援室 NINJA における学習支援の取組			
学校名	京都外国語大学			
発表代表者	村上正行			
連名発表者	高橋 恵子	井ノ口 まりこ	河野 弘美	花本 知子
	坂本 季詩雄	石川 保茂		
キーワード	自律的学習		外国語学習	
	学習環境		学習支援	
発表の概要	<p>京都外国語大学では、自律的な学習者の育成を目的として、外国語自律学習支援室 NINJA (Navigating an Independent Non-stop Journey to Autonomy) を 2014 年に設立した。NINJA では、目的に応じた 3 つのエリアを準備し、アドバイジングセッションやスピーキング・ライティングセッション、ワークショップなどを実施し、学生の自律的学習を支援している。本発表では、2 年間の NINJA における学習支援の取組について紹介する。</p>			

外国語自律学習支援室NINJAにおける学習支援の取組

村上正行* 高橋 恵子* 井ノ口まりこ* 河野弘美*** 花本 知子** 坂本 季詩雄** 石川 保茂**
 *京都外国語大学 マルチメディア教育研究センター
 京都外国語大学外国語学部 *京都外国語短期大学
 masayuki@murakami-lab.org

背景と目的
 京都外国語大学では、外国語自律学習支援室NINJA (Navigating an Independent Non-stop Journey to Autonomy) を設立
 ・自律的な学習者の育成を目的

本報告では、NINJAの施設、学習支援の取組について紹介
 ・目的に応じた3つのエリア(アドバイジングエリア、コラボレーションエリア、ラーニングエリア)を準備
 ・アドバイジングセッション、スピーキング・ライティングセッション、ワークショップなどを実施

運営体制

- ・スタッフ
 - ・専任 ラーニングアドバイザー 1名 (NINJAに常駐)
 - ・兼任 ラーニングアドバイザー 4名 (シフト制)
 - ・兼任 ネイティブ教員 6名 (シフト制で常時1、2名が在室)
 - ・専任職員 1名 (NINJAに常駐)
 - ・アルバイト学生 数名
- ・副学長を委員長とした運営委員会を設置(年2回)
- ・基本的な方針を決定
- ・室長を中心に数名の教職員で定例ミーティングを開催
- ・日々の問題点などについて情報を共有した上で対応





<p>アドバイジング・セッション</p> <p>予約制で45分 日本語で実施 学習者の個性、ニーズに適した学習方法についてラーニングアドバイザーとともに考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・語学学習の目標設定 ・自分に合った勉強法 ・TOEICのスコアアップ ・語学検定試験 (IELTS等) ・専攻語と英語学習の両立 ・時間管理 	<p>スピーキング & ライティングセッション</p> <p>予約制で25分 英語で実施 ネイティブ教員がアドバイス</p> <p>スピーキング</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英会話、発音矯正、口語表現の確認 ・スピーチコンテストの練習 ・英語検定試験 (IELTS等) の面接練習 <p>ライティング</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーション ・エッセイ・論文など ・日記や履歴書 	<p>ラーニングエリアでのイベント</p> <p>さまざまなイベントを企画・運営 ・ハロウィンイベント ・クリスマスイベント ・ワークショップ ・Lunch Meet-ups ・Have a Chat</p>   
--	---	--

NINJAの利用状況・利用者の成績

NINJA利用回数

2015年度2年次生TOEICの伸び NINJA利用の有無別

利用なし	2014利用	2015利用	2年次利用
137	150	174	202



テーマ	授業評価アンケートをどのように授業改善に役立てるのか —京都華頂大学・華頂短期大学教育開発センターの事例紹介Ⅱ—		
学校名	京都華頂大学・華頂短期大学		
発表代表者	浅田 瞳		
連名発表者	松尾 章子	堀出 雅人	
キーワード	アクティブ・ラーニング		授業評価
	大規模講義の実践		教育改革
発表の概要	京都華頂大学・華頂短期大学教育開発センター（以下センターと略）は文部科学省「大学教育改革地域フォーラム」の本学での開催（2012年）を契機に、学長のリーダーシップの下、全学を挙げ教育改革に取り組む「教育改革会議」と連携し、教員FDや教育方法の改善を推進する機関として研究員6名が中心となり事業を進めている。本年度は「本学のアクティブ・ラーニングの実践報告」として、主事の浅田が幼児教育学科2回生を対象とし、共同で担当している「幼児と生活」におけるアクティブ・ラーニングの実践についてその内容と授業評価がどのように関係したのかの報告を行う。		

授業評価アンケートをどのように授業改善に役立てるのか
—京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センターの事例紹介Ⅱ—

浅田 瞳（華頂短期大学 講師 教育開発センター 主事）
堀出 雅人（華頂短期大学 講師 教育開発センター 専任研究員）
松尾 章子（華頂短期大学 准教授 教育開発センター 専任研究員）

京都華頂大学・華頂短期大学教育開発センター（以下センターと略）は文部科学省「大学教育改革地域フォーラム」の本学での開催（2012年）を契機に、学長のリーダーシップの下、全学を挙げ教育改革に取り組む「教育改革会議」と連携し、教員FDや教育方法の改善を推進する機関として研究員6名が中心となり事業を進めている。
本ポスターセッションでは本学の「アクティブ・ラーニングの実践報告」として、主事の浅田が幼児教育学科2回生を対象とし、共同で担当している「幼児と生活」におけるアクティブ・ラーニングの実践についてその内容と授業評価がどのように関係したのかの報告を行う。

1. 対象となる授業についての概要

- ・2014年度後期「幼児と生活」(短大2回生)
- ・幼稚園教諭免許取得予定者が履修
- ・2014年度履修者 207名(科目履修生1名含む)
- ・アクティブ・ラーニングを主に実施したのは下記授業時

【シラバスより】
第5回 幼児と社会とのかわり
第6回 幼児を取り巻く地域社会
第7回 遊びの中で広がり深まる生活経験

2. 前年度の課題

- ・200名を超える学生に発表型の課題を個人に与える。
- ・課題内容は「今の幼児と昔の幼児の生活の違いについて調べ、データも踏まえて客観的な内容を発表する」。
- ・作業時間も含めて学生の学修を進める。
- ・発表には、パワーポイントの作成が必修
- ⇒PCの数が圧倒的に足りない、学生200名に対して本学で常時使用できるPC数は50台弱。
- ・1回生時に情報に関する授業を履修しているにもかかわらず、学生のリテラシーが低かったため、担当者が学生の質問対応にほぼ1か月かかりきりになる
- ・学生の提出された課題をきちんと評価する時間を設けることができず、評価そのものも担当者の主観に左右される部分が大変
- ⇒これらの反省を踏まえ、2014年度の授業を設定した。

3. 2014年度の進め方

- ・4人1組でのグループを前提として課題作成・発表を行う
- ・グループについては条件を提示しながら学生に決定させる
- 【グループ決定の条件】
- ・ABCDすべてのクラスがメンバーにること
- ・同じゼミの人間(1・2回生とも)と組むのはNG
- ⇒ほとんど関わった履修の少ない学生同士を組ませる
- レポートについても最終レポートを除いてグループで提出(全51グループ)

4. グループ発表について

- ・課題は前年度と同様のもの、5分程度のスライド(6枚以上)を作成
- ・グラフをつづり出作成、貼り付け
- ・表紙に名前と役割を記載しておくこと
- ・パワーポイントの資料作成2時間、発表に2時間利用
- ・グループの話し合いについてはきちんと役割分担を明記して適量負担にならないように配慮(表紙、パワーポイント作成者、発表者)
- 【発表当日】
- ・グループごとに発表した。班の得点を記載する用紙を配布
- ・発表班は自分たちの班の得点は見えない
- ・班で話し合っって各々の得点を用紙に記載
- ・それらの平均点を担当者が成績評価に反映(30%)
- 【参考：「幼児と生活」評価の割合】
- 今日の発表 30%
- 最終レポート 40%
- 小レポート(組) 10%
- 小レポート(個人) 20%

5. 授業に関する感想・意見(最終レポートより)

- ・他の人が一生懸命しているのを見て、自分もちゃんとやらないと申し訳ないと思った。
- ・何度言ってもやってくれない人がいて、しんどかった
- ・考えのない課題をみんなで話し合っって深めていくのはおもしろかった
- ・グループ活動をして、普通の授業の方が楽だと思った
- ・自分がリーダーにどう評価されているのかわからない
- ・(班のリーダーはメンバーの賛成度合いに応じて点数の上げ下げを許されているため)
- ・グループで作業することの重要性を知った

表1 授業評価アンケートの比較

	授業は聞き取りやすい	説明が聞き取りやすい	内容は理解しやすかった	パワーポイントの使い方は適切	難易度はちょうどよい
13年	3.87	3.82	3.76	3.66	3.63
14年	3.73	3.64	3.51	3.71	3.52

表2 シラバスに於ける進め方の比較

	シラバスに於ける進め方の比較	質疑のない適切な環境	事前・事後学習	興味・関心が広がる	全体的にこの授業に満足
13年	3.66	3.71	3.68	3.53	3.66
14年	3.64	3.42	3.65	3.70	3.48

5. 授業評価アンケートおよび感想から

- ・アクティブ・ラーニングは一言授業と異なり、個々のグループの活動内容によって得られる知見に大きな違いが生じる
- ⇒結果として、学生の満足度に大きな格差
- ・まったく人間関係を持たないグループで作業することによるメリット・デメリットが発生した
- ・メリット…自分と気の合う友人ではないため、緊張感をもって作業する学生
- ・デメリット…スケジュールの調整が合わない、意見の集約できない
- ・学生との双方向の学修を行ったが、改善する箇所は多い(作業時間の確保、役割分担、活動場所など)
- ・どの程度グループと関わったかによって評価が動く
- ⇒リーダーの人数で学習成果に大きな違い

参考 授業評価アンケートの分析(担当者別・重層分析)

項目	平均	標準偏差	最大値	最小値
本学での授業のスピードは早すぎた	0.130	0.337	0.073	0.200
本学の授業のスピードは遅すぎた	0.360	0.439	0.079	0.124
本学の授業のスピードはちょうどよかった	0.311	0.328	0.111	0.345
授業の準備(事前学習)が足りなかった	0.112	0.301	0.128	0.031
授業の準備(事後学習)が足りなかった	0.309	0.487	0.108	0.076
授業の準備(事前・事後学習)が足りなかった	0.021	0.087	0.006	0.012
質疑のやり取りが適切だった	0.367	0.402	0.041	0.368
この授業の前年・前々年度の授業より	0.011	0.020	0.011	0.027
この授業を通して興味・関心が広がった	0.467	0.465	0.477	0.380
満足度(平均)	0.827	0.798	0.721	0.806



テーマ	アクティブラーナー水準度のアセスメント調査・分析			
学校名	京都光華女子大学			
発表代表者	酒井浩二			
連名発表者	藤田大雪	小澤千昌	阿部一晴	乾明紀
キーワード	アクティブラーナー		アセスメント	
	学習マネジメント力		基礎学力	
発表の概要	大学教育再生加速プログラム（AP）の事業の一環で、アクティブラーナー（ALer）育成に向け、AL 水準調査を本学の3 学科・専攻で実施した。調査項目は、学習マネジメント、基礎学力、学習動機づけの3 領域に分類した。本発表では、その調査分析結果と、学生のALer 水準度の向上に向けた授業運営、授業外課題、学習環境の改善策と平成 28 年度に向けた実施体制を提起する。			



アクティブラーナー水準度のアセスメント調査・分析

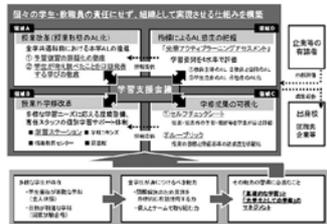
京都光華女子大学 キャリア形成学部

概要
①京都光華女子大学(以下、本学)が、平成26年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム」(AP)に採択を受けたアクティブラーニングの取組み概要について紹介する。
②本学のAP事業の目的は、アクティブラーナーの育成であり、本事業の取組の1つ(下図の領域①)である、アクティブラーナー(AL)水準度のアセスメント調査・分析の結果を紹介する。

1. 本学のAP事業の概要

取り組みの目的
・アクティブな活動を促す授業形態に改善することで、学生の学習・学習態度を高める
・授業形態のアクティブラーニング化を通して、学生を自律的な学習・学習態度を持つアクティブラーナーに育てさせる

具体的な取り組み
上記目的を達成するために、授業内・授業外での多様な取り組みや仕組みづくりを、以下4つの領域に分けて進捗する

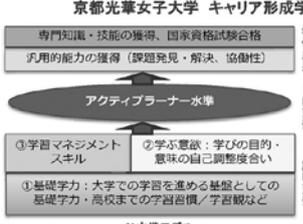


取り組みの概要(全体図)

2. アクティブラーナー水準アセスメントの調査結果

AL 水準	0	1	2	3	4
名称	非AL	教員主導	教員協同	学生自身	他者支援
定義	・言われたことが十分でない	・教員に言われたことは何とかやれる ・自ら工夫して学びに組み込まない	自主的に学ぶ姿勢を持つが、学的方法を獲得しておらず、教員と協働で学ぶ	教員の指示がなく、主体的に学ぶことができる	自分の学んだことを他者に分かりやすく教示でき、他者の学習意欲を高められる
3要素	①: × ②: × ③: ×	①: ○ ②: × ③: ×	①: ○ ②: ○ ③: ×	①: ○ ②: ○ ③: ○	①: ○ ②: ○ ③: ○

AL水準表 ①基礎学力、②学ぶ意欲、③学習マネジメントスキル



AL水準モデル

①学習マネジメントスキル ②学ぶ意欲・学びの目的・意味の自己調整度合い

①基礎学力：大学での学習を進める基礎としての基礎学力・高校までの学習習慣/学習観など

AL水準アセスメント調査の方法
調査対象者: 本学の3つの学科の1~4年生の全学生
調査時期: 平成27年10月~11月
回答者数: 本学の3学科・4学年合わせて766名(回答率80.3%)

3つの要素	認知度	到達度
基礎学力	専門知識・抽象的思考力を要する学び 計画的	0.0003 **
学習マネジメントスキル	実行時の確認チェック 学習の工夫 メタ認知・論理的思考・能動性 学ぶ目的の理解	0.0422 △ 0.0005 ** 0.0000 ** 0.1002
学ぶ動機づけ	外的調整 統合的調整 内発的動機	0.0652 0.0699 0.0000 **

R=0.596

重回帰分析の結果

調査結果の活用

①**教員側**: AL水準を向上させる授業、授業外学習、学習成果の可視化、学習環境の改善策を検討・実施

②**学生側**: 個別指導に向けて学生にフィードバック



AL水準調査分析結果に基づく学生の履修値



テーマ	学科内での授業改善策の議論を促す仕組み作り： 「授業アンケート結果に対する担当教員のコメント」の活用		
学校名	京都光華女子大学		
発表代表者	橋本智也		
連名発表者	土佐嘉宏	相場浩和	水野豊
キーワード	授業アンケート		学生による授業評価
	授業改善		FD
発表の概要	<p>「教育の質を大学自らが保証する体制」が必要とされる中、京都光華女子大学と京都光華女子大学短期大学部では、学科内での授業改善策の議論を促す仕組みとして、授業アンケート（学生による授業評価）を活用する取り組みを進めている。具体的には、従来、集計結果（数値・自由記述）に対する担当教員の全コメントを一覧にして、学内ポータルサイト上で学生・教職員に公開するだけであったが、今年度（平成 27 年度）から、学科内で各教員のコメントを相互に確認するとともに、学科として組織的に対応すべき授業改善策などを議論する取り組みを開始した。議論の結果については、各学科が FD 関連委員会で報告を行った。それらの取り組みによって、各担当教員が個々の授業を振り返るとともに、各学科内で授業の体系性を改めて確認する機会を設けることができ、「教育の質を大学自らが保証する体制」の部分的な構築につなげることができた。議論が行われた改善策の実施状況の検証などが今後の課題である。</p>		

学科内での授業改善策の議論を促す仕組み作り

「授業アンケート結果に対する担当教員のコメント」の活用

橋本智也・土佐嘉宏・相場浩和・水野豊 / 京都光華女子大学 EM・IR 部 (emir@mail.koka.ac.jp)

RESULTS AND DISCUSSION

学生からの具体的・建設的な自由記述が増加傾向
結果に対する教員からのコメント記入率が増加

1. 「授業アンケート結果への教員コメント」を出した各学科の教育改善の議論は代表委員会を援助され、学部長共有の機会となった。また代表決定委員会に報告された。2. 調査はあるが学生の具体的・建設的な自由記述が増加したとする傾向があった。教員のコメント入力率も増加した。個人・組織での活用という意図が学生・教員に浸透するきっかけになったと思われる。教員個人のフィードバックの内容、学科の組織的な改善内容が実行されるかなどを検証することが今後の課題である。

INTRODUCTION

授業アンケートは教育改善サイクルの始点として位置付けることができる

日本において、内部保証、つまり「高等教育機関が、自らの責任で自学の諸活動について点検・評価を行い、その結果をもとに改革・改善に努め、これによって、その質を自ら保証すること」[3]を実現する体制構築が求められている。授業アンケートは、その起点の一つとして位置付けることができる。

METHODS

学科内で教員のコメントを確認し、組織的な改善を継続した授業アンケート結果に対し教員が担当科目にコメントを付けた（学生はポータルサイトで閲覧）、学生に「集計結果が組織的な教育改善に活用されること」と、「責任を持って授業アンケートに回答する姿勢の大切さ」を事前に伝えた。授業アンケート終了後、学科内でコメントを相互に確認するとともに、学科で組織的に対応すべきことを議論した。（例：好評であった教授法の共有、授業内の対応策の作成）、学科に「学生の自由記述に変化があったか」を確認した。

REFERENCES



テーマ	学習支援の活性化：京都光華女子大学学習ステーションの取り組み			
学校名	京都光華女子大学			
発表代表者	藤田 大雪			
連名発表者	小澤 千晶	塩崎 正司	瀧澤 透	鳴岩 伸生
キーワード	学習支援		ピアサポート	
	アクティブラーニング		基礎学力	
発表の概要	学習支援部署である学習ステーションにおいて、初年次科目「仏教の人間観」「シチズンシップ」「数と計算」と連携した学習支援を行った。主な支援内容は、ミニ講座（ノートテイクの技術、レポートの書き方、文章作成術など）の実施、レポートの添削指導、希望者へのグループ指導、学生チューターによる個別指導などである。本発表では、一連の学習支援の詳細とその効果について報告する。			

学習支援の活性化：
京都光華女子大学学習ステーションの取り組み

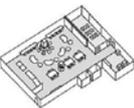
*Koka's Heart** 藤田大雪・小澤千晶・塩崎正司・瀧澤透・鳴岩伸生
(京都光華女子大学)

はじめに
本発表では、学生の学習時間増加をめざした、正課授業と連携した学習支援の取り組みを紹介する。

1. 学習ステーションの概要
学習ステーションは、主体的な学習の支援をめざす、さまざまな学習のサポートの場である。常駐する専任教職員スタッフ(3名)と、学習アドバイザーの教員が、学習全般をサポートしている。



開室時間
月～金/8:30～21:00
土・日/8:30～17:00



スタッフ在室時間
月～金/8:30～18:00
土 /8:30～14:00

2. 日常の取り組み
専任スタッフと学習アドバイザーは、学生の基礎学力の向上や国家試験合格をめざす学生の支援に向けて、さまざまな取り組みを行っている。

ピアサポーターによる学習相談会(4月・7月)
履修登録や試験対策について、先輩学生が後輩にアドバイス。

学習講座
ノートテイク・レポートの書き方・文章作成術などについて、専任スタッフと学習アドバイザーがミニレクチャー。

マイプロジェクトシート
学習計画・学習履歴を記録するプロジェクトシートで、学生の自律的学習を支援。

ただし、これらの仕掛けだけでは多くの学生の利用は見込めない

**授業へのコミットメントを高める
学習支援の取り組みを導入した**

3. 授業へのコミットメントを高める学習支援の取り組み
本学は、初年次基礎教養科目「仏教の人間観Ⅰ・Ⅱ」「シチズンシップ」「数と計算Ⅰ・Ⅱ」をアクティブ・ラーニング重点化授業に指定し、授業へのコミットメントを高める学習支援の環境を構築した。
以下は、学習ステーションが実施した、「仏教の人間観Ⅰ・Ⅱ」のレポート作成支援の取り組みである。

- 授業担当者による補習講義
- 講義DVDの作成と貸し出し
- レポート作成支援ツールの開発・設置
(クリアファイルにて展示中)
- 学習ステーションスタッフによるグループ指導
- 授業担当者等から、とくに個別指導が必要と判断された学生への指導
- 学習ステーションスタッフによる授業内容の解説、およびレポート草稿の添削
- ピアチューターによる草稿の添削、助言等

4. 成果
後期の「仏教の人間観Ⅱ」において、計4回(Topic1～Topic4)のレポート提出時に、学生に、毎回セルフチェックシートを用いて学習行動の記録を行わせた。
回答者164名(全175名中)の学習ステーション利用率は、4度のレポートとも8割以上(82.3%～87.8%)であった。以下は利用の仕方の内訳である。

	Topic1	Topic2	Topic3	Topic4
-DVD・学習会・ミニ講義	13.4%	29.3%	20.7%	31.1%
-添削	48.2%	29.9%	28.7%	23.2%
-自学習	12.2%	18.9%	23.8%	20.7%
-PC貸出のみ	6.1%	3.0%	3.7%	2.4%

これらの利用者には、学科の垣根を越えて友人を作り、ともにレポート作成に励む者も多く見られた。こうした学習コミュニティの形成は、今後の学生たちの成長にもつながる大きな成果である。



テーマ	グローバル・サイエンス・コースの取組と学生の自主的な学び			
学校名	京都産業大学			
発表代表者	伊木貴子			
連名発表者	桜井延子	高木征弘	水口充	中村暢宏
キーワード	グローバル・サイエンス・コース		グローバル人材	
	学部連携		自主性	
発表の概要	<p>京都産業大学では、理学部・コンピュータ理工学部・総合生命科学部の理系3学部と、外国語学部の連携によって世界で活躍できる理系産業人を育成するグローバル・サイエンス・コース（以下、GSC）を2014年度より設置している。現在115名の学生が在籍しており、学生は指定科目の履修を通じて英語力の向上や専門知識の習得などに注力している。学生の活動はそれだけにとどまらない。秋学期集中科目「海外サイエンスキャンプ」を履修して世界で活躍する理系産業人の講義を聞いたり、自主的に留学するなど、世界で活躍することを見据えて大学生活を送る学生が多い。キャンパス内では、GSC生を対象とした月例勉強会や茶話会、昼休みを利用した自主英語学習会 GSC+などの活動に参加し、時には中心となって企画・運営に携わる学生もいる。本発表では、GSC生の活動の紹介とそれによって生まれた学生の自主的な活動について報告する。</p>			

グローバル・サイエンス・コースの取組と学生の自主的な学び

伊木 貴子 (京都産業大学 学長室)、桜井 延子 (京都産業大学 外国語学部准教授)、高木 征弘 (京都産業大学 理学部准教授)、水口 充 (京都産業大学 コンピュータ理工学部教授)、中村 暢宏 (京都産業大学 総合生命科学部教授)

京都産業大学の理系3学部では、平成26年度より「グローバル・サイエンス・コース（GSC）」を新たに設置し、英語を武器に世界に挑むことのできる理系産業人を育成するカリキュラムをスタートした。専門領域の学びを英語で理解し、論文・発表・会話を通じて自分の考えや研究成果を英語で伝えることが目標である。

平成28年3月現在の在籍人数：115名（理学部35名、コンピュータ理工学部40名、総合生命科学部40名）

●授業での学び
GSCでは、1年次の必修科目として外国語学部の協力により特別英語「英語サマーキャンプ」を実施。英語力を高める3日間の集中講座を設けている。外国語学部の学生と理系3学部の学生が交流し、グループでのプレゼンテーション発表を通じて、他学部生との交流を促しながら英語のコミュニケーション能力を養う。

また、専門領域の学びを英語で理解する取組の一環として、理系学部英語専門科目を増やすことで学生が英語で専門領域を学ぶ機会を増やしている。平成27年度は、「数学実演講座」「生物シミュレーション」など合わせて10科目が開講された。平成28年度以降も、3年生以上を対象とした新規科目の開講を予定しており、GSCの学生が卒業するまで英語で専門教育を受けられる体制を整えている。また、海外の大学から研究員を招聘し、セミナーを開講するなどして学生が海外の研究者と交流できる機会を設けている。さらに、専修みを利用して米国西海岸の大学や企業を訪問する集中科目「海外サイエンスキャンプ」もあり、履修した学生は将来について考える機会を得ることができる。

●2つの月次イベント
GSCの登録学生を対象に、「Monthly GSC」と「Global Sision」の2つのイベントを実施している。Monthly GSCは、自身の学びの成果を振り返るePortfolioの活用や、本学の大学院生・卒業生の講演、キャリアについて考えるワークショップなどを実施する月例勉強会である。特に、先輩から話を聞く回では割合を受ける学生も多く、「もっと色々な先輩（卒業生）の話を聞きたい」「もう一度来てほしい」など、定量的な評価が得られた。

Global Sisionは、GSC登録学生を中心に理系3学部の学生と留学生、教職員が集まり、英会話の練習をして交流を深める茶話会である。英語があまり得意でない学生が多いため、積極的に参加してもらえよう教職員がサポートをしている。会話のテーマは日常的なものや、ゲストスピーカーの話を聞いた感想を共有し合うなどであることが多い。平成27年度は、海外からの研究員の他、本学の教職員で漢語検定のある者やGSCの1年生などをゲストに迎えた。

●自主勉強会の実施
学びのペースメーカーとして、英語の自主的な学習の場として提供される勉強会である。GSCの学生を主な対象者として、平成26年度の秋学期より開催している。昼休みや夕方など授業の合間の時間（約20～60分）を利用して学生が学べるよう、教職員が運営してきた。

曜日・時間帯ごとに違うテーマで実施しており、学生のニーズや身に付けてほしい技能を踏まえて企画・運営した。平成27年度秋学期には、以下の4つのイベントを実施した。

イベント名	Chat+	Click	E-Reading+	Project+	E-Grammar+
内容	英会話	BBC News 読書・ディベートセッション	理系英文読解	プレゼンテーション	英文法

GSCの活動から生まれた学生の自主的な学び

- 1. 積極的な学びの姿勢**
GSCの学生は、コースの必修科目「英語サマーキャンプ」を履修して英語力を養いながら他学部の学生との交流の機会を得る。その後外国語学部で開講されている英語科目を履修した学生は英語力に自信をつける。自分の英語力を試すために、夏季集中講座「インテンシブセミナー」(90分授業×6コマ)を受講した学生もいる。

学生は、英語の論文が読める、海外の研究者と意見交換ができるようになることを目標に、さらなるレベルを求めている。
- 2. 学部の垣根を越えた交流**
GSCの活動は理系3学部合同で実施されるため、学生同士の交流も深まり、学部の垣根を越えた交流も多い。学生の中には、GSCでの活動を通じて知り合った他学部の学生とともに共同研究を実施したり、月次イベントの企画・運営に携わるなどし、自主的な活動が盛んでいる。また、平成28年1月に行われた月次イベント「Global Sision」では、理系3学部のGSC生(有志)による企画が実施され、参加学生や教職員に好評を得た。

理学部の学生とコンピュータ理工学部の学生によるツクシンの共同研究
- 3. 自主的に行動する力**
1年次の老学期に集中科目「海外サイエンスキャンプ」を履修し、海外で活躍する研究者や卒業生と接する機会を得た学生は、自主的に学びの場を広げている。2年次の月に英語力向上や海外文化の勉強、見聞を広げるために自ら進んで留学する学生が現れた。海外で活躍する日本人やアメリカの研究者の生の声に触れたことで、自身の将来のキャリアについて考え、自ら行動する力を身に付けたと考えられる。

今後の展望
GSCは、平成28年度には第3期生の募集・選考が行われ、人数も多くなることが予想される。今後は他学部の学生との交流だけでなく、タテのつながり（他学部間での交流）も生まれると考えられる。学生が主体となってイベントなどを企画・運営できる機会を増やし、学生の自主性を促し、主体的・積極性を培った学生を育む力を入れる。

京都産業大学



テーマ	「むすぶ人」をうみだす大学として ～京都産業大学グローバルコモンズの開設～		
学校名	京都産業大学		
発表代表者	尾崎 良子		
連名発表者	松井 きょう子	國正 淳弥	小林 満
キーワード	グローバル人材育成		ラーニングコモンズ
	主体的学習		学習支援
発表の概要	<p>京都産業大学では、2016年4月新たに語学と留学について主体的・能動的な学びを養う場として「グローバルコモンズ」を開設する。グローバルコモンズは、学生が異文化理解を深め、生きた語学力を身につけ、グローバルマインドを涵養する機会を提供する場である。本学の考えるグローバルマインドとは、語学に堪能な人材ということだけでなく、「自己と他者の文化の相違を認め、尊重・理解したうえで、コミュニケーションを行おうとする精神」である。</p> <p>それらのコンセプトを体現するため、『つなぐ』、『重ねる』、『彩る』の3つをテーマに家具を選定・設計した。本報告では、多様なコミュニケーションを誘発する共振空間としてのグローバルコモンズの空間デザイン等について報告する。</p>		

「むすぶ人」をうみだす大学として～京都産業大学グローバルコモンズの開設～

尾崎良子（京都産業大学 学長室）、松井きょう子（京都産業大学 学長室）
小林満（京都産業大学 外国語学部教授）、國正淳弥（京都産業大学 国際交流センター事務室）

発表概要：2016年4月に開設する京都産業大学サキタリウス館グローバルコモンズの空間コンセプトおよび開設に至った経緯について報告する。

2013年3月 図書館ラーニングコモンズ開設

- 図書館ホールをアクティブラーニング空間に改装
- 面積数：215.2㎡
- 床高：1.58m
- 利用者数累計：15,798名（2013年3月～2016年2月）

2014年4月 雄飛館ラーニングコモンズ開設

- 主体的な学習体験を養う知的共振空間
- 面積数：1,860㎡
- 床高：2.02m
- 利用者数累計：172,873名（2014年4月～2016年1月）

2013年4月 グローバル人材育成推進事業採択

ラーニングコモンズ/グローバルコモンズの整備

2016年4月 サキタリウス館グローバルコモンズ開設

- 「語学・異文化理解に特化した空間」～京都産業大学が誇る多目的グローバル空間～
- 面積数：888㎡
- 床高：2.86m
- 収容人数：11名

2015年11月 京都産業大学 創立50周年

京都産業大学
言葉＝「むすぶ人」と読み「うみだす」を意味する
◆大学像：「むすんで、うみだす」、学生像：「むすぶ人」
～人々、知恵と実践、京都と日本・世界の接点域をむすぶ～
◆1965年設立
◆学生数：17,971名（2017年4月現在）
◆学生数：13,199名（2016年11月現在）

Hello! こんにちは! 안녕하세요! Guten tag! Selamat siang! Ciao! Hola! Bonjour! Привет!

グローバルコモンズ・空間コンセプト

知・ことば・人をむすぶ場所 ～多様なコミュニケーションを誘発する共振空間～

“つなぐ”

- 分野を超えた出会いの空間
- 縦横入りし易い（高天井・ガラス）
- 周辺各層へのマグネット機能

“重ねる”

- 知識、経験の高積
- 拡張となる床面の広さ
- シフト

“彩る”

- 多様性・国際性
- 多機能性（多目的・多用途）
- 積極性を演出するアクセント

重なりテーブル

- 3層構造の開放性
- 空間の広さや材料の質感に合わせたデザイン
- 色や形状・高さの多様性

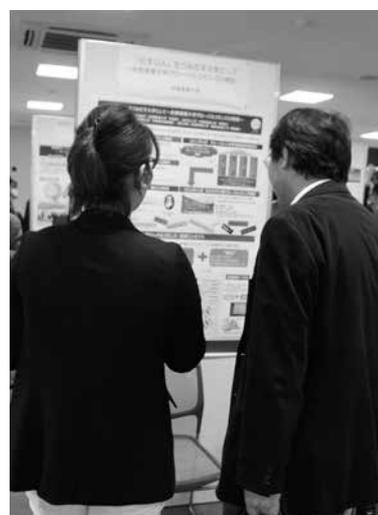
十二単ハンチ

- 十二単をモチーフにしたハンチ
- ハンチのデザイン・機能性を重視

知恵板テーブル

- 知恵の輪（6面カットガラス）をテーマに活用
- 移動式で最大約500名収容
- レイアウトが柔軟

京都産業大学



テーマ	京都産業大学における共通教育必修英語の新たな展開： 【序章】教員主体のFDを基盤とした学生主体の授業		
学校名	京都産業大学		
発表代表者	西谷 敦子		
連名発表者	臼杵 岳		
キーワード	FD		アクティブラーニング
	TOEIC		少人数制クラス
発表の概要	<p>京都産業大学では、平成25年度よりコミュニケーションクラスとTOEICクラスの両輪から構成される新たな共通教育必修英語カリキュラムへと移行した。本カリキュラムは、(i) グローバル社会で必要とされるコミュニケーション能力の育成と、(ii) TOEICという指標を用いて具体的な目標達成を目指す、上方志向のカリキュラムとなっている。本発表では、TOEICクラスでのこれまでの取り組みを報告する。具体的には以下の通りである。第一に、教員主体で年2回開催している教員研修（FD）の取り組みに関して報告する。第二に、そのFDを基盤とした学生主体のTOEIC授業の実践事例を紹介する。第三に、総合大学の共通教育にて1クラス20名という少人数制を実現し、学生主体のTOEIC授業を実践することにより得た教育効果について報告する。最後に、これまでの取り組みから見てきた問題と今後の展望を示す。</p>		

京都産業大学における共通教育必修英語の新たな展開：
【序章】教員主体のFDを基盤とした学生主体の授業
西谷 敦子・臼杵 岳（京都産業大学 共通教育推進機構）

1. 少人数制カリキュラムデザイン・教員主体のFD！

1学年3000名の総合大学で20名の少人数制：アクティブラーニングの実践
・TOEIC・英語コミュニケーション能力=使える英語
・上方志向・習熟度別クラス編成：TOEIC IPに基づく上位クラスへのレベルアップ

毎年2回の教員主体の研修会（FD）
・TOEICクラスでの効果的な教授法（アクティブラーニング）のシェア
・シラバス・教科書・成績評価の統一

2. 教員主体の研修会（FD）！

～研修会に参加した教員からのコメント（抜粋）～

- これまで色んな「研修」に参加したが、一歩深掘りに参加した実質的な研修会で、今後も続けてみたい。
- 大変有意義な研修で、このような素晴らしい研修に参加できることは自分が今後に幸運だ。研修会ほどどんなに継続参加が良くて、自分の長所がないところ、工夫できることを実践できる貴重な機会であり、今後も実践してほしい。

3. アクティブラーニングのTOEIC授業！

TOEICの授業なのに...
グループワーク!!プレゼン!!

4. 改革後の上位層の増加・学生の高満足度！

(1) 改革前との比較

入 学 時	全セメスター時
<p>TOEIC 200</p> <p>TOEIC 200以上</p> <p>TOEIC 200未満</p>	<p>TOEIC 200</p> <p>TOEIC 200以上</p> <p>TOEIC 200未満</p>

(2) 学習成果実感調査

Q: この授業を目標を持って受講することができた。

Q: 自分の成長を実感することができた。

Q: この授業に満足している。

～学生からのコメント（抜粋）～

- TOEICの授業を受けなくて、自分の成長がハッキリと分かった。
- 実際の授業では味わうことがなかった刺激がたくさんあった。
- 20人クラスは、一人ひとりを覚えてもらえ、充実した勉強ができてよかった。
- 全員まんべんなく発言でき、発言することで授業に参加していると実感できる。



テーマ	対話を通じた教育改革・改善への取組 —ミドル（各学部・教育プログラム）の教育改革・改善のスピード化・実質化に向けた試み—		
学校名	京都産業大学		
発表代表者	山内 尚子		
連名発表者	小林 満	物部 剛	中沢 正江
キーワード	教育質保証システム		教育改革・改善
	FD 推進体制		ミドルアップダウン・マネジメント
発表の概要	<p>京都産業大学では、これまで、トップ（全学）、ミドル（各学部・教育プログラム）、ボトム（各科目・教員）の三層構造からなるPDCAサイクルを回しながら、「学部まわり」（各学部執行部と教育支援研究開発センター教職員による対話の場）や、「セラデス勉強会」（学長、副学長とセンター教職員がビジョン等を共有する場）といった部局・立場を越えて本音で語り合える「対話の場」を活用することで、三層の間を繋ぎ、大学全体の教育の質保証に努めてきた。現在、本学では、センターの運営体制を見直し、副学部長クラスで構成する学部FD/SD推進ワーキンググループを教育改革・改善のエンジンにし、各学部へのデータに基づいた提案型の改革・改善支援を推し進められるような体制へ再編成している。</p> <p>本発表では、その推進体制および、ミドル（各学部・教育プログラム）の教育改革・改善のスピード化と実質化を図るために試行している取組内容について紹介する。</p>		

対話を通じた教育改革・改善への取組

—ミドル（各学部・教育プログラム）の教育改革・改善のスピード化・実質化に向けた試み—
山内尚子・中沢正江・小林満・物部剛
京都産業大学 教育支援研究開発センター

これまで 京都産業大学では、トップ、ミドル、ボトムの三層からなるPDCAサイクルを回しながら、学部まわりや「セラデス勉強会」といった「対話の場」を活用することで、三層の間を繋ぎ、大学全体の教育の質保証に努めてきた。

現在 FD/SDの推進体制を見直し、副学部長クラスで構成する学部FD/SD推進ワーキンググループを教育改革・改善のエンジンにし、ミドルの教育改革・改善のスピード化と実質化に向けた取組を試行している。

*「学部まわり」各学部執行部と教育支援研究開発センター教職員による対話の場
*「セラデス勉強会」学長、副学長と教育支援研究開発センター教職員がビジョン等を共有する場



PDCAサイクルの各段階と関係する組織

- Plan: 学部執行部、各学部
- Do: 各学部
- Check: 各学部
- Action: 各学部

試行的取組①
学部授業・カリキュラム改善に向けた「年間計画」の策定と学部間での課題共有

＜これまで＞

- 3月: 学部実務調査
- 4月: 学部実務調査結果報告
- 7月: 学部実務調査結果報告
- 8月: 学部実務調査結果報告
- 10月: 学部実務調査結果報告
- 11月: 学部実務調査結果報告
- 12月: 学部実務調査結果報告
- 1月: 学部実務調査結果報告
- 3月: 学部実務調査結果報告

＜効果＞
これまでPD活動としてPDCAを回していたが、学部が定めた重点テーマに基づきPD活動の活動が行われ、取組内容に一貫性が生まれた。自主的なPD意識が芽生え、学部独自で企画したFDセミナーが積極的に実施されるようになった。（例）「FDセミナー」各学部

試行的取組②
より実質的な議論ができる場を目指し会議体をFD/SD研修の場に

＜実践事例①＞ 先行する学部の事例を共有
7月
●各学部の「改善計画報告」等をもとに事務局が推薦
●各学部のSA(スチューデント・アシスタント)の活用事例紹介
●コンピュータ理工学部委員、地学部委員が1回開催

＜実践事例②＞ 授業手法の実践を共通で体験
11月-2月
●アクティブラーニング授業の導入に活用できるアイスブレイク体験
●全委員がファシリテーター役を体験

＜効果＞
◎1回体験でのWGICに対し積極的だった委員もいたが・・・
「開講のことを学生さんにもやってみたい」「新入生のオリエンテーションで体験させて、学生に主体的に参加を出したり、予んでもらうきっかけとして使えたらいい」といった声も聞かれた。
「こういった体験を各学部の教員にも受けてもらえるような仕組みをつくってほしい」

●各学部が年間計画の段階で「重点テーマ」を設定
！各学部が抱える課題・注力したい教育プログラムがより明確に
！年間通じて一貫性のあるより深い議論がなされるように
！課題解決に向けた学部独自のFDセミナー等の研修会が主体的に実施された

●月1回のFD/SDワーキンググループで副学部長同士が共有
★今後は先行する学部にならない、他の学部へも波及効果も期待

●会議体の中に勉強会の要素を取り入れた
！共通の体験をしたことで、委員間の距離が縮まった
！「アクティブラーニング」「ファシリテーション」といった言葉の共有
！ミドルの教育改革・改善を進めていくうえで大きな前進
「各学部の教員も参加すべき内容だった」「学部教員間で広げるには限界がある」との意見
アクティブラーニングの導入やその他FD活動に対し後ろ向きな教員への対応についてワーキンググループで要検討
グループ学習についていけない学生への対応等、次段階でのより具体的な問題が浮上り、要検討

まとめと今後の課題



京都産業大学

テーマ	雄飛館ラーニングcommons学生スタッフ「LCS」活動紹介			
学校名	京都産業大学			
発表代表者	雄飛館ラーニングcommons学生スタッフ			
連名発表者	林 隆二	西島 奈菜	吉川 和希	高田 浩輝
キーワード	ラーニングcommons		主体的な学び	
	学生による学生支援			
発表の概要	<p>京都産業大学では学生の主体的な学びを促進する「共に学び・共に創る『共創空間』」をコンセプトに、自律学習空間「雄飛館ラーニングcommons」を2014年4月に開設し、学生参加型の運営を展開している。2013年10月の仮オープン時より組織されたラーニングcommons学生スタッフは、施設の保守管理業務の補助を有償で行いながら、学生の視点からラーニングcommonsのさらなる活用につながる提案や、イベント企画・実施を通じ学内のアクティブラーニング推進の一端を担っている。</p> <p>本発表では、ラーニングcommons学生スタッフの活動状況と今後の展開について報告する。</p>			

雄飛館ラーニングcommons学生スタッフ「LCS」活動紹介

～「ラーニングcommons見学ツアー」を通じた新たな気づき～

京都産業大学 雄飛館ラーニングcommons学生スタッフ
 林隆二（法学部4年次）・西島奈菜（経営学部3年次）・吉川和希（経営学部4年次）・高田浩輝（経済学部2年次）

概要 京都産業大学雄飛館ラーニングcommonsでは、ラーニングcommons学生スタッフ（以下LCS）が有償・無償問わずラーニングcommonsの活性化をめざし活動している。本発表ではLCSの活動状況と見学ツアーについて報告する。

雄飛館ラーニングcommonsとは？

2014年4月にオープンした雄飛館ラーニングcommonsは、「共に学び、共に創る」をキーワードに、学生の主体的な学び（アクティブラーニング）を行う学習環境の提供、および支援を行っている。

LCSとは？

雄飛館ラーニングcommons学生スタッフ（LCS）
 →2013年10月より、ラーニングcommonsの仮オープンに合わせて活動開始
 →学部、学年を問わずさまざまな活動経験のある学生が多く在籍（計2名、2014年2月現在）
 →ラーニングcommonsの活性化を目的に活動

LCSの主な活動

① シフト勤務 勤務時間 8:45～20:45
 シフト交代制（名簿制）
 ・巡回→時間に余裕
 ・寝機整備・ホワイトボードの清掃、レイアウトの乱れ補正等
 ・注意喚起・携帯充電、食べ物、電磁気り等

② ワークショップの開催
 2014年12月4日
 「宇宙箱再移住大作戦」開催
 12月11日
 「LCSのグループワーク」開催
 ・業務外で施設の利用と促進の為に、学内の教員と協力しながら企業を実施

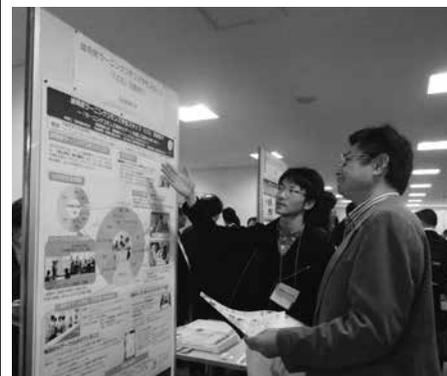
③ 見学ツアーの対応（日本語/English）
 対象：ラーニングcommonsについて知りたい方（誰でも！）
 内容：各スペースのコンセプトや利用方法をツアー形式で解説
 これまでの実績：学外一人学務職員、企業等一約六件
 学内一回随分経時
 例→ゼミ単位での見学ツアー

④ 夏期オープンキャンパスでのツアー対応
 2013年8月1～2日、2日、5月22日実施
 ①オープンキャンパス企画の立案
 ・LCS同士で企画のアイデアを出し合った。
 ・屋外の設置、デザインを設計。
 ②当日のようす
 ・普段のようにラーニングcommonsが活用されているかイメージしやすいよう展示を行った。
 ・Excel.isを用いて、各席の様子を写真で紹介。
 ③ツアー参加者の感想
 <大学がいいなと思った！室内がとてもいいのでありがとうございました！>
 <たくさんの施設があって色々なことに対応できるな>と思いましたが、優しくて明るい学生さんが多くて雰囲気のいい大学だと思いました。 ※当日いただいた感想の中から抜粋

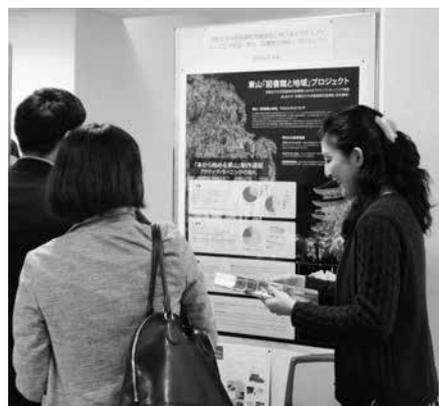
今後の展開

- ・学内外に限らず教職員の方々の多くは過去にどのようなイベントが実施されたのかについて興味を持っている。
- ・いつでもどこでも何かが10分に認知されている。
- ・定期ミーティングの実施→イベントの企画立案や業務に関する意見交換をミーティングの場で活発に行う（相互支援）。
- ・IC利用促進のためのより効果的なイベントの企画・実施→本学学生のニーズを捉え、そこにスポットを当てたイベントを企画する。
- ・他大学のラーニングcommonsを視察

ICが中心となって、ラーニングcommonsをさらに活性化させていく。



テーマ	京都女子大学図書館司書課程におけるアクティブ・ラーニング実践： 東山「図書館と地域」プロジェクト		
学校名	京都女子大学		
発表代表者	桂 まに子		
連名発表者			
キーワード	アクティブ・ラーニング	アカデミック・スキル	
	図書館と地域	教育実践の可視化	
発表の概要	<p>平成 24 年度より導入された図書館司書課程の新カリキュラムは、「新しい図書館に対する展望を持ち、現状を積極的に改革できる人材」の養成に力を入れている。そこで、本学図書館司書課程では、図書館実習を希望する受講生を多数含む図書館総合演習をアクティブ・ラーニングの手法で授業設計し、東山「図書館と地域」プロジェクトの実践を試みた（学内の平成 27 年度【学長採択型】「特色ある教育プログラム」として採択）。</p> <p>アクティブ・ラーニングの要素としては、大学図書館や公共図書館の地域資料、インターネット上の情報、図書館員や地域の人から得られた地域情報など、多様な種類の情報源を駆使して能動的な学習を進めていく点が挙げられる。また、学生たちが協働して制作した東山の魅力と課題を伝える冊子は、学生自身の学習成果であると同時に、アクティブ・ラーニングを可視化した教育ツールとしても有用である。本発表では、プロジェクトの概要と教育効果について報告する。</p>		



テーマ	京都府立大学 京都和食文化研究センターの取組紹介		
学校名	京都府立大学		
発表代表者	福原 早苗		
連名発表者	小沢 修司	小池 学	
キーワード	和食文化		ユネスコ無形文化遺産
	地域創生戦略		世界文化首都・京都
発表の概要	<p>「和食：日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録され、和食の持つ文化性を保護・伝承・発展させ、世界に発信するとともに、京都府の地域創生戦略と連携し、和食文化と地域産業・地域農業を結びつけ食文化を新産業に育て上げる人材の育成が求められている。</p> <p>上記の認識の下、本学において国際的に注目される創造的新学問領域として和食文化学科（仮称）の開設に向けて準備を進めている。</p>		



Kyoto Prefectural University
京都府立大学



京都和食文化研究センター

(設立:平成26年11月)

●センターの取組紹介

- 1 和食文化の高等教育機関開設に向けた取組(開設目標31年度)
 - ・日本ではじめての本格的な和食文化の高等教育機関「和食文化学科(仮称)」を開設し、地域の食文化の創造性を拓き、京都の文化的価値を高める人材を育成する。
- 2 和食文化に係る教育・研究を推進
 - ・新学科開設時の基幹科目へと発展させるべく、27年度から「和食の文化と科学プログラム」を試行的にスタート。
 - ・28年度からは、「食文化原論」「和食文化論」等を新たに開講。
 - ・和食文化に係る研究も進行中
 - 【②研究テーマ】：①箸の持ち方・使い方のための基礎的研究
②歴史的背景を踏まえた現代社会における精進料理の意義の探求と普及
- 3 食関連企業・府地域創生戦略等との連携による教育・研究の促進
 - ・食関連企業、料理界等のニーズや府の地域創生戦略に合致した教育・研究を展開
- 4 府民向けリカレント講座を実施
 - ・和食文化の学びの社会還元の一環として、リカレント講座「和食の文化と科学」(全5回)を平成26年度から開講。【平成27年度申込者数:134名】



<高機能野菜・桂うりの活用研究・桂うりスムージー>



<箸の持ち方研究>



<日本料理アカデミー、大阪ガス、キッコーマン、カゴメとの共同記者会見(27.9.7)>



テーマ	京都府南部地域 ともいき（共生）キャンパスで育てる地域人材		
学校名	京都文教大学		
発表代表者	押領司 哲也		
連名発表者	中村 里江子		
キーワード	ともいきキャンパス		地域人材
	共同研究	地域志向教育	社会貢献
発表の概要	<p>本学は平成 26 年度に文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）に採択されました。本学は宇治市や京都市伏見区と協働し、建学の理念である「共生」の精神を具現化するために、大学のリソースを地域発展に、また地域のパワーを大学教育に活用し、大学と地域が共に生かしあい、ともに生き生きする「ともいき（共生）キャンパス」の創造を目指しています。COC 採択後、1 年を迎え、本学の「ともいきキャンパス」、地域人材育成の状況をお伝えします。</p>		

京都文教大学 COC 事業概要図 (事業期間: 平成 26 年度～30 年度)

京都府南部地域ともいき(共生)キャンパスで育てる地域人材

建学の理念である「共生」の精神を具現化するために、大学のリソースを地域発展に、また地域のパワーを大学教育に活用し、大学と地域が共に生かしあい、ともに生き生きする「ともいき(共生)キャンパス」の創造を目指す。

宇治市
宇治市
宇治市立総合文化センター
宇治市立図書館
宇治市立生涯学習センター
宇治市立市民会館
宇治市立体育館
宇治市立市民ホール

研究
ともいきシンクタンク
地域志向研究センター
地域志向研究センター
地域志向研究センター

教育
ともいき人材の育成
ともいき人材の育成
ともいき人材の育成

社会貢献
ともいきプラットフォーム
ともいきプラットフォーム
ともいきプラットフォーム

伏見区
伏見区
伏見区立総合文化センター
伏見区立図書館
伏見区立生涯学習センター
伏見区立市民会館
伏見区立体育館
伏見区立市民ホール

教育
ともいき人材の育成

研究
ともいきシンクタンク機能

社会貢献
ともいきプラットフォーム機能

2015 年、全学共通科目「地域入門」が始動

2015 年度「地域入門」全 8 回開催

平成 26 年度「地域志向研究センター」機能

平成 27 年度「地域志向研究センター」機能

平成 28 年度「地域志向研究センター」機能

平成 29 年度「地域志向研究センター」機能

平成 30 年度「地域志向研究センター」機能

京都府南部地域まちづくりミーティング

京都文教公開講座

京都文教大学 地域志向研究センター

京都文教大学 地域志向研究センター



テーマ	地域資格制度による組織的な大学地域連携の構築と教育の現代化		
学校名	龍谷大学		
発表代表者	村田 和代		
連名発表者	久保 友美		
キーワード	地域公共政策士		アクティブ・ラーニング
	人材育成		地域連携
発表の概要	京都という地域の様々な課題の解決を目指す人材育成の能力を保証する大学院レベルの地域資格として「地域公共政策士」を平成 23 年度より産学公民の連携のもと開発・運用を行ってきました。平成 26 年度からは新たに学部生を対象とした「初級地域公共政策士」を加え、運用をしています。その地域資格制度の枠組みやプログラム内容、その取組がもたらす社会的効果等について発表いたします。		

地域資格制度による組織的な大学地域連携の構築と教育の現代化

—9大学（龍谷大学、京都大学、京都府立大学、京都産業大学、京都大学、京都文教大学、成美大学、同志社大学、佛光大学）の連携による教育プログラム改革の取組—

■ 目的・養成する人材像

地域社会に関する多様な理論・政策・地域活動が理解でき、地域社会の改革や発展のための計画やプログラムの策定を、主体的に実行することができる知識・技能・職務遂行能力を持った、公共的なマインドを有する人材「地域公共人材」を養成するため、アカデミックな教育と職業教育を兼ねた教育プログラム「地域公共政策士」資格教育プログラムを開発。そのプログラムを大学の教育課程に埋め込むとともに、その効果を京都府北部地域と連携しながら結びつけ、地域課題の解決に資する仕組みを構築し、地域活性化に資する新たな大学の役割の創出と、高等教育の改革を目的とする。

■ 事業の展望

すでに枠組みを開発している「地域公共政策士」資格制度を学部レベルに拡充し、「初級地域公共政策士」資格教育プログラムを開発する。展望としては、大学が地域社会のパートナーの1員となった課題に取り組む地域連携を基盤とした教育プログラムとするため、アクティブ・ラーニングの要素を取り入れ、アカデミックな教育だけでなく、職業教育にもつながるような教育プログラムとし、大学教育課程に埋め込むことで、大学教育の現代化に資する大学改革を実施する。

また、資格開発に切りかわられた成果を、現在大学が一つしか設置していない京都府北部地域で展開させる。

■ 連携のメリット

地域社会の課題解決において、複数の大学が重要な協働のパートナーとして役割を果たす経験を確かなこととすると、大学が連携すると大学教育の現代化に向けたより先進的なプログラムを構築することができる。

また、京都における大学と地域連携の取組を評価し、発信するために、DEQDとの共催企画を確かなことが可能となった。

■ 取組内容・成果

○ 教育改革

「地域公共政策士」資格制度においては、学部レベルの「初級地域公共政策士資格教育プログラム」では総合的学修「アクティブ・ラーニング」の要素を、修士レベルの「地域公共政策士」では政策提案学修「キャプストーン・プログラム」を必須としており、各大学において、地域課題解決や地方創生に向けた多様な取組の現場を随時設定し、展開している。

○ ステークホルダーとの協働・評価体制

「地域公共政策士」資格教育プログラムを開発し、それに伴う成果を京都府北部へ転化することを視野に入れて設立された「一般財団法人京都府北部地域・大学連携機構(CUANKA)」は、本事業のステークホルダーを中心として組織され、拠点を京都府北部に構えて本事業と連携しながらプログラム開発やプロジェクトを実施している。

また、本事業で開発される教育プログラムの質保証のため、「地域公共政策士」を運用する第3者機関「一般財団法人地域公共人材開発機構」による社会的認証評価を採用し、EJの質保証の仕組みを参照しながら構築を進めている。

■ 具体的な事例

○ 事例1「初級地域公共政策士」資格教育プログラム開発に伴うカリキュラム改革

新たに学部レベル資格「初級地域公共政策士」資格教育プログラムを開発し、平成27年度より運用を開始している。それに伴う各大学においてカリキュラム改革を行った。「初級地域公共政策士」資格教育プログラムにはアクティブ・ラーニングの要素を含むことを条件としたことにより、地域連携活動を含むアクティブ・ラーニングが科目化され、正課として実施されることが可能となった。これにより、地域連携を通じての学習効果が理解され、各大学のディプロマ・ポリシーの実現における中核的な科目群として設置することができた。

○ 事例2「京都府北部地域における教育プログラム開発」

京都府北部地域への人材育成機能の展開を目指した取組として、一般財団法人京都府北部地域・大学連携機構と京都府との協働による「いなか留学」「ローカルインターン」プログラムを開発した。学生が短期間、京都府北部地域に滞在し、地域での暮らしや仕事を体験することで、いなかの魅力を見つけ、自分の未来を見つめるプログラムとして、多くの大学生が参加し、事前学習をした上で、京都府北部で実践・体験を行い、事後学習を行うといった課外教育プログラムであり、大学間の共同教育が実現された。

今後このような教育プログラムを単位互換プログラムとして正課科目化することを検討する。

■ 今後の取組

○ 本事業による「教育の現代化」をさらに進め、講義の共同実施や単位互換制度の活用を検討するとともに、連携大学のみならず他大学にも受け止められるよう、発信を行う。

○ 一般財団法人京都府北部地域・大学連携機構を通じて京都府北部地域での人材育成機能を高めるとともに、京都府北部との連携を定着させる。

■ 連携機関

<ステークホルダー>
一般財団法人京都府北部地域・大学連携機構、一般財団法人地域公共人材開発機構、京都府、京都府、公益財団法人京都市農林・まちづくりセンター、京都府工業連盟、一般財団法人京都府経貿協会、特定非営利活動法人きょうとびのセンター。

<連携大学コンソーシアム等>
公益財団法人大学コンソーシアム京都

■ 学生の声

京都府福知山市100人ミーティングに参加して

龍谷大学 政策学部 政策学科 4年次 伊藤 弥広

100人ミーティングでは、地元や自身の関心のある自治体のお話を聞き、思いや共感を持って暮らすこと、地域に貢献できることを学びました。思いや共感を持って暮らすことは、地域に貢献できることにつながります。思いや共感を持って暮らすことは、地域に貢献できることにつながります。思いや共感を持って暮らすことは、地域に貢献できることにつながります。

